

少ない学習時間で学ぶ学習者のための 日本語教材開発報告

ータイ国中等教育機関の日本語選択コース用教材ー

三浦多佳史・プラパー セントーンスック

[キーワード] タイの日本語教育、中等教育段階、教材開発、選択科目、少ない学習時間

[要 旨]

国際交流基金バンコク日本文化センター（以下JFBKK）では、タイの中等教育で、週1、2回の少ない時間で日本語を学ぶ学習者を対象にした新しい教材の開発を進めてきた。『こはるシリーズ』と呼ばれるその教材に関し、ひらがな教材『こはるといっしょに ひらがなわあ〜い』についてはすでに開発過程の報告^①を行ったが、本稿では続いて出版された場面会話と日本文化を学ぶ教材についての開発過程を報告し、拡大する中等教育段階の日本語学習者に必要とされる教材とはどのようなものかについて考察した。この教材の完成によって、タイの中等教育では、たくさんの時間を使って学ぶ学習者向けの教材と、少ない時間を使って学ぶ学習者向けの教材の2種類が用意されたことになる。

1. はじめに

タイの中等教育機関の日本語教育の状況については Prapa 他（2012）でも詳しく述べた。そこでも指摘したとおり、週6コマ程度、年間約200時間をかけて日本語を学ぶ第2外国語専攻コースでは、すでに2004年に開発された初級用日本語教材『あきこと友だち』が広く使われている。一方で1週間に1、2コマ程度の、専攻コースに比べて大変少ない時間で学ぶ日本語選択コースでは適当な主教材がなく、現場の教師から新しい教材を求める声が上がっていた。こうした状況を踏まえ、JFBKK ではタイ中等教育機関日本語選択コース向けの新しい教材を開発した。本稿は、新たな教材の概要と開発の過程を報告するものである。

2. 事前調査結果

開発にあたって、タイ北部、中部、東北部、南部の4地方において事前調査を実施した。上記4地方で日本語選択コースを開講している標準的な21校の教員27名への聞き取り調査と、4地方12校で日本語選択コースを受講している学習者計542名に対し、質問紙調査を行った。この調査に関しては Prapa 他（2010、2012）に詳しい報告があるので、ここでは、調査結果から窺える新しい教材開発に関しての重要なポイントについて以下にまとめる。

表1. 調査結果から窺えるポイント

	学習者	教師
新しい教材に求めるもの	<ul style="list-style-type: none"> ・文字の学習 ・簡単な日常会話 ・日本料理や日本の歌など日本の文化や習慣 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字の学習 ・楽しくできる活動やタスク ・日本文化や社会事情の学習 ・写真やイラストなどを豊富に使って見た目が明るいもの ・さまざまな教具や素材がセットになったもの
学習者の問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことが多すぎてなかなか定着しない ・日本語学習の動機付けが希薄 	
教師の問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力、日本社会に対する知識に自信がない ・十分な準備の時間がない 	

この調査が行われたあとに、2010年よりタイの教育省の方針により、理科系の学生も第2外国語が必修となり、中等教育での日本語履修者の数が大幅に増加した⁽²⁾。調査結果では学習者の問題点として希薄な動機付けが挙げられているが、学習者の増加は日本語への関心が高まる効果が期待される一方で、学習動機が希薄な学習者をさらに多く生み出していることも指摘したい。制度変更、あるいは方針変更による学習者の増加は、自分の意思で学ぶのではなく、制度の中で成り行きで、あるいは選択肢が限られていて仕方なく学んでいる生徒たちも多く含んでいると推測されるからである。

またタイの後期中等教育で、日本語を選択科目として学習している学習者を対象に第2言語不安調査を実施した下村(2008)によれば、学習者が日本語の教室内で不安を感じる時として「日本語の授業の速さについていけないとき」「日本語の授業で、たくさんのことを勉強しなければならないとき」「日本語の授業の内容が難しくわからないとき」などがあげられると述べている。つまり少ない学習時間で学ぶ教室では授業の速さと学習量、難易度に対して不安を抱く学習者が多く、新しい教材の開発に当たっては、この点に関しても配慮が必要だと考えられた。

以上の結果等を考慮して、新しい教材の内容は、①文字、②簡単な日常会話、③日本文化・事情の3つの内容を取り扱うこととし、1) ひらがな学習編、2) 場面会話及び文化編の2編を製作することとなった。2) の場面会話編と文化編を分けて製作することも検討されたが、出版社の販売上の戦略から、分けなくて製作することとなった。1) のひらがな学習編は、『こはるといっしょに ひらがなわぁ〜い』というタイトルで、2011年3月に出版され、その開発過程はPrapa 他(2012)で詳しく報告した。2) の場面会話及び文化編も、『こはるといっし

よに『にほんごわあ〜い』（以下『にほんごわあ〜い』）という名前で、『にほんごわあ〜い1』が2012年5月に、『にほんごわあ〜い2』は2013年3月にそれぞれ出版された。本稿では、主に上記2）の場面会話及び文化編の『にほんごわあ〜い』について報告する。

3. 教材開発の基本方針

開発を進めるに当たって、まず新しい教材開発の基本方針を検討した。方針の検討に当たっては、JFBKKの開発チームと外部の協力者であるタイの大学教員、高校教員らとの合宿形式のブレインストーミング等を経て、開発チームで基本方針を作成し、確認した。

3.1 全体方針

タイ国教育省が掲げる中等教育段階で学ぶ外国語科目の学習目的は以下である。

「学習者が、外国語に対して前向きな態度を持つこと、外国語を使えるようになること、いろいろな場面でコミュニケーションができること、知識を探求すること、仕事をする、進学することを目標とする。さらに、世界の様々な事情や文化を知り、理解し、創造的に世界に考えや文化を伝えることができることも目標とする」⁽³⁾

この中で「外国語を使えるようになること」「コミュニケーションができること」については、レベルによって違いもあるが、前述のような限られた学習時間では達成するのは難しい。そこで、この教材の目標は言語の習得ではなく、「外国語に対して前向きな態度を持つこと」や「世界の様々な事情や文化を知り、理解し、創造的に世界に考えや文化を伝えることができること」を中心的な目標にすることにした。この新しい教材で日本語を学ぶことで、たくさんことばを覚え、日本人のように上手に日本語を話すことができるようになることを目指すのではなく、異なった言語を話す人や、自分とは違う文化を持つ社会や人々に対して、自然に前向きな態度を持てるように、日本語学習を通じた人間的成長を目指すこととした。具体的には以下のような人に成長してほしいと考えた。

「たとえば、学校を訪れた日本人に対し、臆することなく、何かしら日本語で話しかけることができる人」

「たとえば、学校を訪れた日本人がタイ語がわからなくても、タイ語、知っている日本語、英語などを使って、積極的にお互いが理解することに努めることができる人」

「たとえば、さまざまな異なる言語、異なる文化を持つ人が、自分と違っていてもそれは当たり前のことだと素直に思える人」

「たとえば、様々な異なる言語、文化を持つ人と、自然に協力し合って、ともに生きていくことができる人」

この教科書で日本語に出会った中等教育段階の若い学習者たちが、さらに次の段階で日本語

を学びたくなるような、入り口の役割を担うことが大切だと考えた。

3.2 場面会話編の基本方針と内容

調査からわかった学習者の問題点として、①学ぶことが多すぎて定着しない、②日本語学習の動機付けが希薄、の2点が挙げられた。1回の学習項目が多すぎたり、学ぶ進度が速すぎたり、また1回休むと、もうついていけなくなったりすることも、これら問題点の原因のひとつであると思われた。少しずつ知識の幅を広げていくタイプの教科書では、一度わからなくなってしまうと次からの授業についていけなくなり、急速に学習動機付けがしぼんでしまう。

そこで『にほんごわぁ〜い』の場面会話編では次の方針で臨むことになった。

3.2.1 各ユニット学びきりで、いつでもどこから学習してもかまわないモジュール形式

前回までに学習したことを覚えているとの前提ではなく、各ユニットで扱う語彙や表現はすべてそのユニットで学習する。他のユニットにも出てくる語彙や文のパターンであっても、そのユニットで出てくればそこでもう一度学習するので、既習事項を忘れていても授業に楽しく参加できる。これはつまり毎回、学習者全員が同じスタートラインに立っているともいえるので、落ちこぼれが存在しない。また、年度途中から新たにクラスに参加することも可能である。

3.2.2 少ない学習時間に合わせた、厳選された学習項目

継続して学習してもなかなか学習項目が定着しないという反省から、学習時間や学習環境に合わせて、学ぶ内容を少なくした。上記のとおり各ユニット学びきりなので、タイの中等教育の、ひとコマ50分から100分程度の授業時間で十分消化できる内容にした。学習語彙数は各ユニット最大9個、取り上げる会話パターンも、基本は1やりとりの以下の例のようなものだけとした。

ナット：こはるちゃん、どんな科目が好きですか。

こはる：体育が好きです。

さらに、余力のある学習者向けには、もう少し発展した受け応えも学習できるよう、配慮されている。タイの中等教育日本語選択科目のコースでは、学習期間が1年間から3年間まで多様である。しかしながら、この各ユニット学びきり、のモジュール形式の教科書ならば、全部で38ユニットの中からそれぞれの学習期間に合わせて、学習するユニットを選ぶことができるので、1年間から3年間まで、どの期間にも対応できる。

3.2.3 達成感を重視した内容構成

勉強の義務感から解放し、日本語学習が楽しいものだと感じられるよう、文法説明や語彙の説明をなくした。学習する会話の場面や状況説明は、各ユニットの扉ページで、まずタイ語で会話を紹介し、次ページでその同じ場面の日本語会話に出会うという構成になっている。学習者はその段階で日本語の構造そのものの説明がなくても、やり取りの内容は理解できるという仕掛けである。

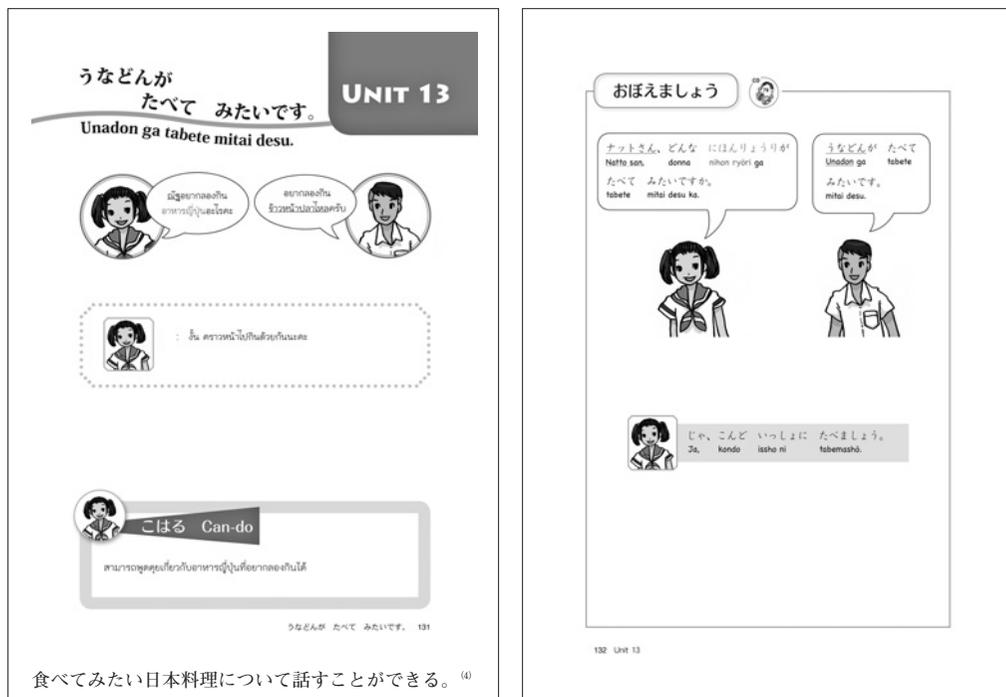


図1. ユニット扉ページのタイ語会話と次ページの日本語会話の例

学習者は上記会話の下線部のみ入れ替えて、自分のことについて語るができるが、下線部に入れる語彙は最大9個をイラストで紹介する。これら会話例と語彙はCDで耳から確認でき、次に類似会話の聞き取り練習ができる。耳からのインプットのあとは、学習した語彙を使って、自分のことを話す練習、さらには、「やってみよう」のコーナーで友達にインタビューするなどのタスクに挑戦し、まとめる。繰り返すが各ユニットで学ぶ項目は、50分から100分程度の限られた時間で十分に学べる量となっており、多くの学習者が最後の会話練習で達成感を得ることができる。

全体方針で述べたように、この教科書の学習目的は日本語の習得ではなく、異文化接触にひるまないためのトレーニングである。そのため、各ユニットの学習後に、学習項目が定着することよりも、何らかの達成感を持ってもらうことが重要であると考えている。このような体験

を重ねることによって、うろおぼえの日本語であったとしても、本当に日本人にあったときに使ってみようという気持ちになってもらえるといい、と考えた。

3.3 文化編の基本方針と内容

前述の調査では、学習者の多くが日本の文化や習慣の学習を希望していた。学習時間が少ない学習者でも、効率的かつ意欲的に学べるよう、文化編はタイ語で学べるものを製作することになった。また前述のタイ国教育省が掲げる方針「世界の様々な事情や文化を知り、理解し、創造的に世界に考えや文化を伝えることができること」を目指すために以下の目標を設定した。

- 1) 日本の、特に若者を取り巻く文化・社会事情について理解する。
- 2) 自国の文化・社会事情について日本と比較することによって理解を深める。
- 3) 異文化を自分自身で捉え、消化し、対応できる能力を身につける。

さらに、これらの目標を達成するために、以下の方針を立てた。

3.3.1 既存知識と新たな情報による自分自身の日本・日本人像の構築

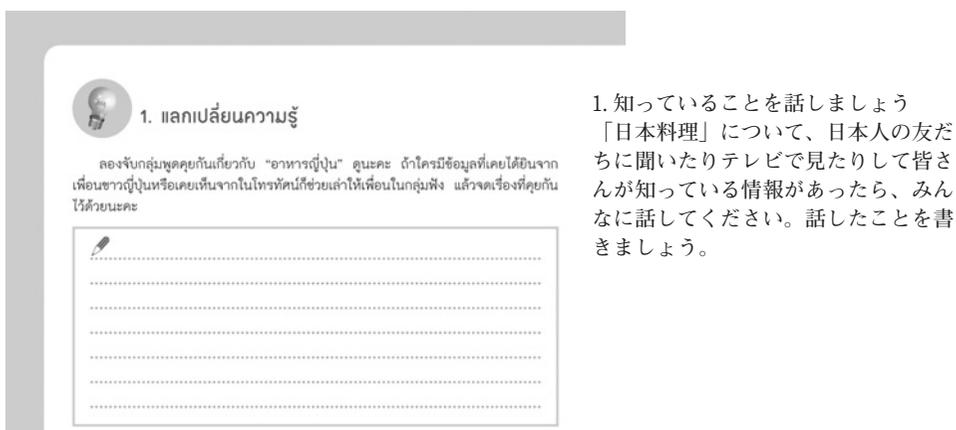


図2. 文化編の既存知識まとめのページ例

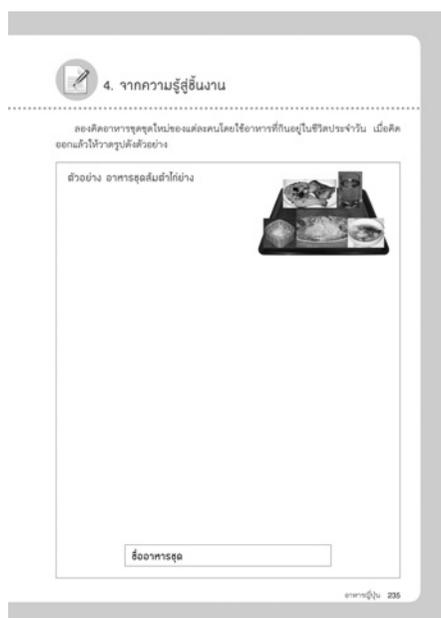
前記 3.3の1)の目標達成を考えるにあたって、学習者それぞれの日本文化・社会事情のイメージは学習者自身が形作るものだと考えた。ステレオタイプを押し付けるのではなく、既存の知識の確認(図2)や、この教材で与えられる新しい情報について自分自身で考え、経験することによって、その人自身の日本・日本人像が形成されるよう促す。

3.3.2 比較による自国文化の意識化

随所に自国文化について考える仕掛けをもうけ、日本文化・社会事情の学びを通して、自国文化についても新たな気づきや再認識ができるよう促す。

3.3.3 クラス内調査、発表、ポスターの作成などを通した、気づきと学びの活性化

学びのまとめでは、クラス内調査やポスター作成、日本文化の疑似体験などの活動を実施し、その日の学びを実際の活動を通して自分で消化する。たとえば「日本料理」のユニットでは、日本の定食文化について学んだあと、「やってみましょう」で自分の周りの食材を使った「私の定食」を考案し、それを絵に描いてみるというタスクが課せられる。日本の文化を自分の周辺で疑似体験する仕掛けである（図3）。また、学びの振り返りを巻末のシートに記入することで自身の変容に気づき、ポートフォリオとして記録する。これらの活動によって、異文化をより身近なものとして感じられるようになるのではないかと考えた。



4. やってみましょう

みなさんが毎日よく食べている食べ物を使って、みなさんのオリジナル定食を作ってみましょう。考えたら例のように絵に書いてください。友だちにどんな定食か、話してください。

図3. 「にほんごわあ〜い1」ユニット27「日本料理」のやってみよう

3.3.4 実際の写真やイラストの提供

タイの中等学校、特に地方の教室では、なかなか生の日本の情報にアクセスする機会がないのが実情である。そうした教室内で日本文化・社会事情を学ぶ学習者を動機付けるため、できるだけ生き生きとした情報を提供したいと考え、可能な限り本物の写真やイラストを付属のパワーポイントで見ることが出来るようにする。

3.3.5 教師を支援する、詳しい内容の解説書

後述するが、タイ中等教育の教師は、授業以外の仕事も多く、授業の準備に割ける時間が少ない。また、訪日経験のない教師も多く、現代日本文化・事情に関する情報も乏しいと考えら

れる。これらの問題を抱えたノンネイティブ教師が使うことを前提に、トピックに関するできるだけ詳しい情報を別冊の解説書（非売品）にまとめて提供し、3.3.4のパワーポイント教材と併用することで、教師はほとんど事前準備をしないでも授業をすることができるよう配慮する。

4. 企画から出版までの流れ

教科書開発の企画が持ち上がったあと、出版までの流れは下に記したとおりである。

表2. 出版までの流れ

	ひらがなわぁ～い	にほんごわぁ～い
2009年10月	企画提案	
2009年11月 ～2010年3月	事前調査	
2010年4月 ～2010年5月	試用版執筆	開発基本方針の検討
2010年6月 ～2010年9月	協力校で『ひらがなわぁ～い』試用	
2010年9月		開発チームおよび監修者で開発基本方針の確認と場面会話編、文化・事情編のシラバスすりあわせのための合宿
2010年10月 ～2011年2月	試用後のフィードバックを受けた改定、編集作業	試用版の執筆および協力校での試用を並行して実施。
2011年3月	出版	
2011年4月 ～2011年12月	タイ全国7ヶ所で広報セミナー実施	
2012年1月 ～2012年4月		試用後のフィードバックを受けた改定、編集作業
2012年5月		『にほんごわぁ～い1』出版
2012年5月 ～2012年8月		タイ全国6ヶ所で広報セミナー実施
2013年3月		『にほんごわぁ～い2』出版
2013年5月 ～2013年8月		タイ全国6ヶ所で広報セミナー実施

2009年10月に企画書を作成してから、約半年で事前調査、その後1年で1冊目の『ひらがなわぁ〜い』を出版、さらに1年ごとに『にほんごわぁ〜い1、2』を出版した。その間、試用版の作成、協力校での試用、試用結果に基づく変更訂正、最終原稿決定後の編集などの作業が継続して行われた。

今回の教科書開発に当たっては、出版社との協働が欠かせなかった。広くタイ全土の中等教育機関で展開する日本語教育の隅々にまでこの教材を浸透させるためには、出版社が持つノウハウとネットワークを生かすのがもっとも効率的と考えられた。そのため、早々に企画に賛同してくれそうな現地の出版社を選定し、企画書作成の段階から話を持ちかけて一緒に開発を進めることで同意を得た。JFBKK側から、タイにおける日本語教育の現状と今後の見通しを丁寧に説明し、中等教育段階の日本語教育がいかに大きなマーケットに育っていくかの見通しを共通認識として確認した。

5. 開発過程の詳細

5.1 開発体制

上記スケジュールで開発を進めるための開発チームの体制は以下のとおりである。

- ① 企画と事務局：国際交流基金バンコク日本文化センター（タイ人専任講師1名と国際交流基金からの日本人派遣専門家1名（以下派遣専門家））
- ② 執筆：『ひらがなわぁ〜い 本編』：JFBKK タイ人専任講師
『ひらがなわぁ〜い 活動』：JFBKK 派遣専門家2名
『にほんごわぁ〜い 場面会話編』：JFBKK タイ人専任講師
『にほんごわぁ〜い 文化編』：JFBKK 派遣専門家、地方派遣専門家2名
- ③ 監修：タイ高校教員3名、国際交流基金日本語国際センター専任講師1名、派遣専門家2名
- ④ 翻訳：タイ大学教員2名
- ⑤ 協力校：バンコク3校、北部3校 計6校
- ⑥ 画像収集スタッフ
- ⑦ 編集スタッフ（出版社）
- ⑧ 音声録音協力
- ⑨ サイト開発スタッフ

タイの中等教育の日本語教育で中心的な役割を担っている高校の教員3名と『あきこ』の開発に関わった国際交流基金日本語国際センターの専任講師、およびJFBKKとタイの東北部の大学に派遣されている派遣専門家2名の計6名が内容の監修にあたった。

また前述のとおり文化編はタイ語で学ぶことが基本となっているが、執筆者は全員日本人で

あり、初稿はすべて日本語になる。これをタイ語に翻訳する翻訳者が必要となり、日本語とタイ語の翻訳を専門とするタイ人大学教員2名が翻訳にあたった。

ほかに、特に文化編はタイの学習者がタイにいながらにして日本文化をできるだけ実感できるように、本冊以外に画像を多く搭載したパワーポイントを作成するため、その画像収集のスタッフを置いた。

編集作業はタイの出版社が担い、JFBKKのスタッフが適宜サポートした。以上、多くの人がかかわって出版することができた。

5.2 取り上げる場面会話と文化トピックの抽出

場面会話編、文化編、それぞれで取り上げる場面会話や文化トピックの抽出は以下の方法で行った。

- 1) 場面会話編では、この教材のコンセプトに近いと思われる市販の教材を7種類^⑤、文化編では教材と資料を8種類^⑥選び、それぞれに取り上げられている場面会話、文化トピックを整理した。
- 2) 1)の資料を基に、執筆者と監修者が集まって実施した内容検討合宿で、協議した。
- 3) 2)の協議結果をもとに、再度開発担当者で検討を重ね、最終的に場面会話編で38ユニット、文化編で18ユニットのトピックを選んで決定した。

5.3 試用協力校での試用版の試用とフィードバック

前述のとおりバンコク3校、北部3校の計6校で試用版を試用してもらったが、場面会話編、文化編ともにすべてのユニットを、いずれかの協力校で最低1回は使ってもらい、さまざまなフィードバックを得た。また、JFBKKのスタッフも計15回の授業見学を行い、開発中の教材の改善に役立てた。試用協力校の担当教員から得たフィードバックの主なものとその対応策は以下のとおり。

表3. 主なフィードバックとその対応策

試用後のフィードバック	対応策
全体的に日本語での説明がないので、日本語でも指示が書いてあるともっとわかりやすい。	出版と同時に開設した「こはるといっしょにサポートサイト」(後述)で、指示文の日本語訳や日本語版パワーポイントなどが無料でダウンロードできるようにした。
場面会話編は前期中等教育では量的にちょう	会話練習「やってみましょう」の後に「やっ

どいいが、後期中等教育はでは少し物足りない。	てみましょう+」を追加。さらに発展した会話も練習できるようにした。
会話例は基本的な1やりとりの会話だけでなく、もう少し発展した会話も紹介したほうがよい。	モデルの会話パターンに加えて、もう少しやり取りの多い会話パターンを追加した。余裕のある学習者はこちらも練習することができる。
文化編の情報によってはステレオタイプになりやすいものもあるのでよく整理したほうがよい。	データや写真のみで情報を説明すると印象が強すぎる場合があるので、こはるなど登場人物に情報を語らせることで緩和した。

5.4 翻訳作業

文化編の翻訳チームとの作業は以下の行程で行われた。

- 1) 文化編執筆チームによる原稿執筆
- 2) 翻訳者による試用版原稿翻訳
- 3) 協力校による試用およびフィードバック
- 4) フィードバックに基づく原稿書き直し
- 5) 翻訳者による再翻訳
- 6) 最終翻訳確定会議

以上のプロセスを経て最終翻訳が確定した。合宿形式で行った上記6)の最終翻訳確定会議では、誤訳を極力避けるため、日本人の執筆者と翻訳者が同席したうえですべての翻訳原稿の確認を行い、翻訳に間違いがないかどうかを確認し最終原稿を確定した。

5.5 文化編パワーポイントに掲載する画像の収集

前述のとおり、日本国外で学ぶ、日本に行ったことのない学習者が大半を占めるタイの中等教育での日本語学習を対象としているので、日本文化の学習には、実際の画像を多数見せることが効果的であり、不可欠であると考えた。しかしながら著作権、肖像権の許可を得た画像の購入はコストがかかりすぎ、教材の販売価格を中等教育の学習者でも購入できるレベルに抑えたいと考えていたため、現実的ではなかった。そこで、写真を収集するにあたっては以下の方法をとった。

- 1) バンコク日本人学校での授業の様子や、日本食レストランの日本料理など、バンコクでは周りに、思った以上の日本のリソースがあるので、協力を依頼した上で開発スタッフが自分で撮影する。
- 2) 日本の観光地の写真や中高生の制服の写真など、日本にいる協力者に依頼して、海外では

入手しにくい写真を撮影して送ってもらう。

3) 日本の企業や団体に、写真を無償で使わせてもらうよう依頼する。全部で80を超える団体、個人から協力を得た。

以上の方法で『にほんごわぁ〜い1・2』あわせて500枚以上の写真を収集し、掲載した。

5.6 中等学校日本語教師への配慮

『こはるシリーズ』の特徴のひとつとして現場の教師への配慮があげられる。タイの中等教育の教師は授業以外の仕事も多く、授業前の準備をする時間がなかなかとれないのが現状だという話をよく聞く。また、事前調査からも、日本語力や日本社会に対する知識に自信がないのが問題点としてあげられている。これらの問題に対し、次のような対応をとった。

1) 周辺教材の提供

付属のCDのほかに、教室での練習に使える場面会話のパワーポイント教具やゲーム活動のための絵カードを作成した。

2) 文化編教師用解説書

日本社会の現状についてよく知らない教師でも、準備なしで授業ができるよう、提出されたトピックに関する、タイ語で書かれた詳しい解説書を用意した。

3) 日本人教員への配慮

場面会話編、文化編のタイ語で書かれた指示文の日本語訳を作成した。文化編のパワーポイントはタイ語で作られているので、PDF版の日本語訳を作成した。

4) こはるサイトの開設

出版と同時に「こはるといっしょにサポートサイト」<http://www.koharutoisshoni.com/main/>を開設し、上記周辺資料がすべて無料でダウンロードできるようにした。

5.7 広報セミナーの実施

4. 「企画から出版までの流れ」でも触れたが、本教材はそれぞれ出版後に広報セミナーを実施している。出版直後に出版社主催で全国規模の大きめのセミナーを実施したほか、主要な地方都市をめぐる巡回広報セミナーも実施した。JFBKKが実施している「さくら地方研修会」⁽⁷⁾の機会を利用し、『ひらがなわぁ〜い』は計6回、『にほんごわぁ〜い1・2』はそれぞれ5回ずつの広報セミナーを全国の主要都市をまわって行った。いずれも6時間の時間をかけて、内容の説明と、使い方ワークショップを実施した。参加者には教材を一冊ずつ無料で進呈したが、バンコクでのセミナーを含め計19回のセミナーで延べ1,000名以上の参加があった。現場で役に立つ教材の開発を行ったという自負はあったが、広く中等教育の現場で働く先生方に理解を求め、かつ有効に使ってもらうためには、このような広報活動は欠かせない。タイでは

JFBKK が中心になってさくら中核メンバーとの共催で上記研修会を実施しているが、この研修会が絶好の広報の場となり、出版から2年余りですでに合計出版部数4万部を超えている。優れた教材を開発し、さらにそのよさを広報して実際に現場で使ってもらってこそ、成果があったといえるのではないかと思う。

5.8 出版後に寄せられたコメント

出版後、実際に教科書を使った先生方から、次のようなコメントが寄せられた。

(1) 全体についてのフィードバック

- ・教科書の順番にやる必要がなく、そのクラスの進度や生徒のレベル、教師のプランに合わせて、どこからでもはいていけるというのがとてもいい。
- ・各ユニットの量がちょうどいい。短い時間のコースに合う。
- ・あまり準備する時間がない教師にとってとても便利だ。準備する負担が減ったにもかかわらず、計画通り授業が進められた。
- ・会話編も文化編も内容が生徒にとっての身近なトピックなので、興味を引き出すことができている。
- ・今までの日本語選択コースは最初のコースから勉強しなかった生徒は途中でコースに参加できなかったが、この教科書は文法積み上げ形式ではないので、途中からでも参加できるようになってよかった。

(2) 「場面会話編」についてのフィードバック

- ・生徒は日本人と話す勇気を持つことができ、積極的にコミュニケーションする姿が見られた。
- ・各ユニットの会話は短くて覚えやすいし、言葉の数もちょうどいい。
- ・聞く練習がたくさんあるのはよい。聞き取れて喜んだ生徒が多くて、動機づけにもなる。
- ・多くの場面は生徒にとっての身近な場面なので、友だちにインタビューするときに積極的にインタビューできた。
- ・語彙にアクセント記号がついていて、教師も生徒も自信を持って正しく発音できる。
- ・ローマ字表記があり、文字がまだ完全にできない生徒には役に立つ。
- ・幅広くいろいろな表現が出てくるが、文法的なことにはほとんど触れず、あくまでも日本語の会話表現ということに絞ってあるのは目的がはっきりしていて指導しやすい。
- ・以前は文字を終えてから会話を教えていたが、いつも文字を教える時にも会話も取り入れたほうが良いと思っていた。この教科書では、文字と会話を並行して授業が行える。

(3) 「文化編」についてのフィードバック

- ・パワーポイントにも絵や写真がたくさんあって教えやすいし、生徒の興味を引き出すことができている。

- ・「やってみましょう」の活動、特に日本料理のユニットの活動がととてもよい。学生は色々な料理のアイデアを出した。例えば、ゲーンソムすし、グリーンカレーすし、ゲーンタイプラーラーメンなど。
 - ・活動に参加したりポートフォリオを書いたりして自分の文化を考えるきっかけになった。
 - ・学習の後で、生徒はもっと日本語を勉強したくなったようだ。
- (4) 上記以外に改善を求める以下のようなコメントもあった。
- ・文化編と会話編を別々の本にしてほしい。
 - ・場面会話編に簡単な文法説明を入れてほしい。
 - ・文化編のクイズを各ユニット10ぐらいに増やしてほしい。

6. おわりに

以上、タイ国中等教育で日本語を学ぶ学習者、とりわけ少ない時間で学ぶ学習者を対象にした教材の開発について、特にその開発過程に重点をおいて報告した。特に強調したかったのはこの教材開発は開発側が提供したい教材を作成したのではなく、タイの中等教育の現場で必要とされる教材は何か、現場で喜ばれる教材はどのようなものか、というところをよく考えることから始まっている。本冊はイラストが豊富ですべてカラー印刷だが、販売価格は中等教育の学習者が購入できるよう、しかも一冊まるごとコピーするよりも買った方が安くなるように価格設定されている。これは一例だが、現場で実際に使う場合のさまざまな制約にいろいろな形で答えようとする姿勢の現れである。世界では200万人を超える中高生の日本語学習者がいる。しかし、彼らのなかには自分の意思で学ぶのではなく、制度の中で成り行きで、あるいは選択肢が限られていて仕方なく学んでいる生徒たちも多くいるのが現状である。彼らにとって、教室の中が日本や日本語とのはじめての出会いの場所であり、そのときの印象がその先の日本語との関係を大きく決定付ける場合もあるだろう。日本語との最初の出会いの場が、楽しく、有意義なものに感じられるよう、最低でも日本語はいやだと思われないう、さまざまな工夫を施した教科書がこの『こはるシリーズ』である。本稿が、これから海外の現場で教材の開発に関わる方々の一助となれば幸いである。

〔注〕

⁽¹⁾Prapa 他 (2012)

⁽²⁾国際交流基金が3年ごとに行っている「海外日本語教育機関調査」の2009年調査と2012年調査を比較すると、タイの日本語学習者は64.5%、人数にして5万人を超える増加になっており、この方針の影響が大きいことが推定される。

⁽³⁾『仏暦2551年基礎教育カリキュラムに沿った外国語学習ガイドライン』（国際交流基金バンコク日本文化センター訳）からの抜粋。仏暦2551年は西暦2008年にあたる。日本語訳は公開していないが、英語訳

は http://www.curriculum51.net/viewpage.php?t_id=95で確認できる。

⁽⁴⁾ 『こはるシリーズ』はタイ語で書かれているので、本冊にはこの日本語訳はついていない。本稿では、参考として理解に必要な日本語訳を付加した。以下図2、図3も同様。

⁽⁵⁾ 以下の7冊を参照

- ① 『いっぽ にほんご さんぽ 暮らしのにほんご教室 初級1』スリーエーネットワーク
- ② 『Nihongo Fun & Easy』アスク出版
- ③ 『にほんご これだけ1』ココ出版
- ④ 『こどもにほんご宝島』アスク出版
- ⑤ 『Hai! : an introduction to Japanese』Copeland Wilson + Associates Ltd.
- ⑥ 『Obento Snack Pack1,2』Cengage Learning Australia
- ⑦ 『初級日本語 あきこと友だち』タイ紀伊国屋

⁽⁶⁾ 以下の8種類の教科書と資料を参照

- ① 「JF 日本語教育スタンダード」国際交流基金
- ② 『エリンが挑戦！日本語できます 「見てみよう」』国際交流基金
- ③ 『エリンが挑戦！日本語できます 「やってみよう」』国際交流基金
- ④ 『初級日本事情 考えよう話そう改訂版』福岡日本語センター
- ⑤ 『日本を話そう』Japan Times
- ⑥ 『留学生のための日本事情入門』文理閣
- ⑦ 『日本事情入門』アルク
- ⑧ 『初級日本語 あきこと友だち』タイ紀伊国屋

⁽⁷⁾ JFBKK では国際交流基金本部のさくら中核事業のスキームにより、タイ国のさくらネットワーク中核メンバー（JFBKK、チュラーローンコン大学、タマサート大学、コンケン大学、タイ国日本語日本文化教師協会 JTAT）と共催で、2010年度から全国5ヶ所（2010年度は6ヶ所）の地方都市を年に2回ずつ回って日本語教師研修会を実施している。

〔参考文献〕

- Prapa SANGTHONGSUK、三浦多佳史、渋谷実希（2010）「中等教育機関の日本語選択コース教材作成にあたっての調査結果報告」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第7号
- Prapa SANGTHONGSUK、三浦多佳史、渋谷実希（2012）「タイ国中等教育機関の日本語選択コース用ひらがな教材開発報告」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号
- 下村朱有美（2008）「タイ後期中等教育における選択科目としての日本語教育—高校生を対象とした第二言語不安調査からの一考察—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第5号、27-36

